本山寺・神峯山寺の森林保全へのとりくみを始めました

常俊 容子(NOB)

■自然観察ハイクを開催、「本山寺・神峯山寺の森林保全協議会」が設立されました

6月12日、「本山寺の自然観察ハイク～初夏の本山寺を歩く」には総勢65名が参加。梅雨入り寸前の好天に恵まれ、池田裕計さん(NOB)、佐久間大輔さん(大阪自然史博物館)、田口圭介さん(TKK高槻公害問題研究会)、松井淳さん(奈良教育大)を講師に、それぞれ得意分野の楽しい解説を聞きながら神峯山寺界隈から本山寺まで古刹の森林を観察しました。

今回の観察ハイクは、次項に示すような神峯山寺・本山寺地区の自然の特性・重要性とともに、シカ採食圧の影響の懸念を確認するために行われたもので、解散前には「本山寺・神峯山寺の森林(もり)保全協議会」の設立が承認されました。

当地は80年代より池田さん、田口さんたちのグループのフィールドであり、ナチュラリスト講座でも90年代には本山寺に宿泊していたなど、ご縁があります。また保全協会としては、以前から大阪府に対し、この地域のシカによる採食圧の増加に関し懸念をつたえてきました。その結果、「大阪府シカ保護管理計画」第2期(2007～12年)より新たに「生態系への影響」の記載と、それにもとづき、府のシカモニタリング業務の一環として採食圧確認を働きかけ、昨秋当地も調査ポイントとしました。(今年度も継続する予定)

シカによる植生の劣化は各地で報告されており、現況の把握とモニタリング調査等の結果を待ってからの対策では回復のタイムリミットに、もはや間に合わない事態が懸念されます。近い将来に当地でのシカ密度の調整、植生保護柵(防鹿柵)設置等の早急な対策が必要です。

しかし農林業被害に対しては防除や有害駆除が有効ですが、シカによる自然生態系への被害(＝生物多様性の消失)対策は

・適切な個体数密度は不明・有害捕獲の効果は不明
・森林での防除は広大すぎて困難

などから容易ではありません。

以上を踏まえ、「本山寺・神峯山寺地域の健全な森林環境の保全」を目的として、適切な野生動物保護管理と植生回復の方策を検討するため、現況を明らかにする」ことを目的に、「本山寺・神峯山寺の森林保全協議会」を6月12日付けで設立しました。当面事務局は保全協会が担当します。発起人は以下のみなさんです。

本山寺住職・百済寂仁、TKK代表・田口圭介、特定非営利法人森林再生支援センター理事長・村田源、社団法人大阪自然環境保全協会会長・高田直俊

この他、アドバイザーとして、大阪市立自然史博物館・佐久間大輔、京都大学農学部森林生物学分野講師・高柳敦、奈良教育大学植物生態学研究室教授・松井淳、の各氏に加わっていただきます。

本山寺での集会でお話をされる百済住職

■本山寺・神峯山寺地域の植生と今後の調査

佐久間 大輔(大阪自然史博物館)
松井 淳(奈良教育大)

原の集落から本山寺にかけての今回歩いた観察コースは里山から低山の社寺林、山地の社寺林へと至る植生の変化が楽しいコースです。里周辺の里山、用水路脇に並ぶ台場状のクヌギ、竹林を抜けて、すすみます。神峰山寺駐車場付近から水路沿いに

道をとると、谷筋には大きなケヤキやエノキ、オニグルミやイロハモミジがひろがり、斜面にはカゴノキの混じるコジイの林となります。さらに植林、周辺に残ったウラジロノキなどが混ざるネジキやコバノミツバツツジの柴山、低層のみが徐伐されたコナラ・アベマキ林をへてアカガシの多い本山寺周辺に至ります。境内の大きなヒノキを見て、寺の裏に回るとそこにモミ・ツガ林が広がっています。しかし、そのコースのいたるどころで、シカの食痕が多数見られていました。

高槻市の本山寺から神峯山寺にかけての地域は、大阪府下で唯一、暖温帯下部のコジイ林から暖温帯上部(中間温帯)のモミ・ツガ・アカガシ林までの垂直分布が観察できる、府内では唯一の森林域です。開発や植林の進んだ大阪府下において、これだけの多様な森林植生が残るこの地域は、寒い時代の森から暖かで人の影響が薄かった時代の森までが概観できる貴重な場所であり、大阪府下における生物多様性保全上大変重要な場所といえます。

特に、本山寺のモミ・ツガ・アカガシ林については、イヌブナやコハウチワカエデ、イヌシデなどをふくむ暖温帯上部の大変質の高い森林です。ブナの森は雪深い地域で、ブナが高木のほとんどを占める純林を作りますが、イヌブナはこのような針葉樹やアカガシを伴う多くの樹種が混交する森となります。モミやツガの森は府下では箕面山や剣尾山さらに京都の百井峠(北山)や比叡山などに点在しています。東日本の太平洋側から中部地方にかけても同様の植生が点在し、ブナ林ほどに一般の人には浸透していませんが、より希少で気温や大気汚染などの影響も受けやすい、大変貴重で重要な森林です。

さらに、大阪府下の植物相についての基礎資料である「大阪府植物誌」(1962)を執筆した堀勝氏は次のように本山寺の森林の価値を述べています。「山頂付近は自然のままで良く保存され、100年以上と思われる高木が多く、一部には天然林の様相を呈したところもあって、植物の種類では淀川北部の産地では随一と言って良い。北摂の山々でも箕面・妙見に次いで大切なところであるからこのような自然のままの林相でぜひ保存したいところである」とその学術的価値をのべています。

このため昭和53(1978)年1月20日「大阪府自然環境保全条例」で14.32haが「大阪府自然環境保全地域」に指定されています。周辺は「本山寺山国有林」、「母樹林」、「銃猟禁止区域」などに指定され、「大阪府立北摂自然公園」の一部であるなど、モミツガ林だけでなく一帯の自然は法的には何重にも公的保護されています。さらに言えば、なによりこれらの森林は神峯山寺・本山寺という古くからの寺院によりながく保護されていたわけです。

かつて、1972年当時のシカの状況についての府による狩猟者への聞き取り調査では本山寺周辺の群れ(府境またいだ数値)としてわずか10～15頭とされていました。しかし、近年高密度になり、本山寺の境内ですら頻繁に目撃されるようになりました。周辺からは低木や草が大幅に消失しています。このままでは、森林の更新が危ぶまれる状況にあります。

1978年の文化財指定時に、当時の現況を調べる調査が当時京大助教授であった堀田満さんを中心に行われています。この調査は4haの広大な地域の全立木について記録した膨大なものです。詳細な記録のおかげで、現在の木々それぞれの高さや直径など32年前の状況を知ることができます。つまり、この記録と現在の状況を比較することで、森林の状態やシカの被害を推測できるのではないか、と考えています。

現在当時の毎木調査記録の整理を終え、今後実地調査による検証と解析により、シカの状況と植生へのインパクトの調査・植生保護柵の試験的設置とモニタリングなどを実施したいと考えています。

自然観察ハイクで解説をする佐久間さん